

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 9 日現在

機関番号：34316

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2015

課題番号：26770015

研究課題名(和文)フレデリック・ヘンリー・マイヤーズの研究 南方熊楠と関連させて

研究課題名(英文)A Study of Frederick William Henry Myers: The Connection with Kumagusu Minakata

## 研究代表者

唐澤 太輔 (KARASAWA, Taisuke)

龍谷大学・その他部局等・研究員

研究者番号：90609017

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 800,000円

研究成果の概要(和文)： 南方熊楠(1867-1941)が多大な影響を受けた、Human Personality and Its Survival of Bodily Death Vol. 1 & 2とその著者であるフレデリック・マイヤーズ(1843-1901)について研究を行った。

まず、ケンブリッジ大学図書館において、英国心霊現象研究協会のメンバーリストの調査を行った。それによって、日本人初の同会の会員やマイヤーズの住んでいた場所などを発見することができた。次に、前掲書を精読し南方が参照・引用した箇所を特定し翻訳することで、南方による夢や超常現象に関する言説の多くがこの書から影響を受けていることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)： In this research, I studied Human Personality and Its Survival of Bodily Death Vol. 1 & 2 and its author Frederick William Henry Myers (1843-1901). Kumagusu Minakata (1867-1941), an influential Japanese folklorist and naturalist, was strongly influenced by this book. The main contents and results of the research are as follows.

First, I investigated the member lists of the Society for Psychical Research at the Cambridge University Library. Thereby, I was able to discover the first Japanese member of the Society, and identify the house where Myers resided. This house was the important place where Myers conducted a lot of psychical experiments. Next, I read carefully the aforementioned book and identified some sections which Minakata referred to or quoted in his diaries or articles and translated them into Japanese. Thereby, I revealed that most of Minakata's psychological statements about his dreams and supernatural phenomena were influenced by this book.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：南方熊楠 マイヤーズ SPR 那智山 心身論

## 1. 研究開始当初の背景

19世紀末、近代科学技術の発展と並行して、人々の間で心霊主義(オカルティズム)への関心が急激に高まった。特に、当時世界最大の学問都市であったロンドンでは、知識人たちによる公開降霊会などが頻繁に行われていた。そのような「怪しい」集会、サークルは、当然非難もされたが、一方で科学技術や合理主義に疑問と不安を持った人々にとっては、一種のアジールともなっていた。

フレデリック.W.H.マイヤーズ(1843-1901、Frederick William Henry Myers、古典文学者、詩人)が、近代社会精神史上果たした役割は極めて大きい。例えば、マイヤーズは、英国心霊現象研究協会(The Society for Psychical Research 通称:SPR)を創設し、長年にわたり重鎮として活躍した(この協会は、2016年現在でも継続している)。SPRでは、自動発話、人間同士の「テレパシー telepathy」交信の可能性を知ることこそが、心の不思議な仕組みについて解明する手がかりとなると考えられ、集中的な研究課題とされていた。

実は、マイヤーズは、日本人であれば誰もがどこかで一度は聞いたことがあるであろうこの「テレパシー」という語を創出した人物なのである。さらに彼は、心理学者・フロイト(Sigmund Freud, 1856-1939)をイギリスに初めて紹介した人物でもあった。

近代心理学あるいはトランスパーソナル心理学の分野における、このような大きな功績にもかかわらず、現代の日本においては、マイヤーズという人物は、完全に忘れ去られてしまった(あるいは、まったく知られていない)と言っても過言ではない。この「忘れられた研究者」に関するまとまった研究も、日本ではこれまでほとんどなかった。では、マイヤーズが活躍していた19世紀後半において、彼による心霊研究は、人々にどれほど認知されていたのであろうか。特に、近代日本の知識人たちは、マイヤーズの研究をどのように捉えていたのであろうか。

本研究の着想の背景には、平成20年度・第1回南方熊楠若手研究奨励事業に採択された、筆者の研究『南方熊楠「夢」の記述に関する研究—「やりあて」と関連させながら—』がある。この研究において、南方熊楠(1867-1941、博物学者、民俗学者、粘菌研究者)が、論考・日記・書簡においてしばしばマイヤーズ最大の著作 *Human Personality and Its Survival of Bodily Death* Vol.1 & 2(以下 *HP*)を引用していることが明らかになった。南方は、「近来稀なる著作」とこの著作を非常に高く評価しており、また、「抄訳し、それに小生の注を付し、最後に小生の論を付し……」(1904年3月24日付土宜法龍宛書簡)と、同書の和訳・刊行さえ構想していたのである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的の一つは、マイヤーズという人物に再度光を当てることである。そして、その手がかりとなる人物が、南方熊楠なのである。南方は、当時の日本人の中では極めて早く *HP* に目をつけ、何度も書簡や論考などで引用している。筆者が十年来、南方とその周辺を研究してきて分かったことは、日本において、ここまで *HP* を精読し、自身の著作に取り入れている人物はいないということである。先述した通り、南方は、この著作を、自身で翻訳し出版しようとさえ考えていた。

本研究は、心霊主義を擁護する立場にはない。しかし、心霊主義には、当時多くの人たちが真正と判定し、また多くの科学者たちの調査対象となったという歴史的経緯がある。その、いわば社会精神史的な意義は、心霊主義をただ単純に否定するところからは見えてこないはずである。

本研究では、南方の言説を中心に、その周辺(時代状況・人物)を調べることで、日本において、当時、心霊研究がどのように扱われており、またどのような人々が研究していたのかを明らかにしていく。同時に、社会精神史上、マイヤーズがどのように位置づけられるかを知るために、特に彼の著作に対する、当時の日本の知識人たちの姿勢について概観していく。

## 3. 研究の方法

まずは、マイヤーズによる「テレパシー」という語の作成経緯とその周辺について、南方との関係を中心に考察していく。さらにSPR発足の経緯などを洗い出していく。その過程で、マイヤーズとその周辺人物との関連を明らかにする。マイヤーズがどこで(書簡・論考・書籍等)この語を最初に使用したのかを、SPR紀要とSPR会報を中心に調査する。紀要・会報他、SPR関連書籍が完備されているケンブリッジ大学図書館で調査を行う。さらに、当時、英国の新聞などで、マイヤーズ及び *HP* がどのように取り上げられていたかを大英図書館において調査する。また、この書物が当時の日本の知識人たちにどのように受け入れられていたかを、井上円了(1858-1919、哲学者)が組織した「不思議研究会」の動向とその周辺の人物の言説を中心に調べる。

次に、南方と *HP* との関係性を明らかにする。南方は、ロンドンに居た頃、世間で流行していたオカルティズムに対してかなり批判的で「オカルチズムごとき腐ったもの」(1893年3月3日付土宜法龍宛て書簡)とまで言い放っている。しかし、帰国後、那智山に孤居するようになった頃から、その態度は一変する。具体的には、那智山において *HP* を入手した頃からである。それだけ南方が *HP* の内

容に共感した(大きな影響を受けた)ということであろう。

まずは、南方が *HP* をいつ入手し、どのようなメモをとっているかを調査する。その後、南方が *HP* のどの箇所を参照あるいは引用しているかを明らかにする。さらに、その箇所を和訳する。南方は、*HP* を多く参照しているが、ページ数を示しているだけであったり、訳していても当時の文語体であったりする。そのような箇所を明らかにし、改めて翻訳を試みる。

南方が *HP* のどのような箇所に関心を持ったのか、またその背景には何があるのかを明らかにする。

#### 4. 研究成果

##### (1) ケンブリッジ大学図書館での調査成果

(東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ『エコ・フィロソフィ』第9号において発表)

2014年8月26日～9月11日、ケンブリッジ大学図書館での資料調査を行った。マイヤーズは、ケンブリッジ大学で学び、同校の講師も務めたことがある。また、*SPR* の重鎮たちはケンブリッジ大学出身者が多かった。そのため、ケンブリッジ大学には、*SPR* に関する記録が多数残っている。調査では、まず、ケンブリッジ大学図書館に所蔵されている *SPR* 紀要と会報のメンバーリストを、発刊年から現在に至るまで精査した。

その結果、1903年紀要巻末のメンバーリストから、姉崎正治(1873-1949、号・嘲風、宗教学者、東京大学図書館長)の名前を発見した。彼こそ日本人初の *SPR* 会員なのである。これは、今まで全く知られていなかった事実である。

さらに、このメンバーリストから、マイヤーズの自宅の場所を特定することができた。そこは、しばしば心霊実験の舞台となった場所である。ケンブリッジ大学図書館から歩いて10分程の所にある *Leckhampton House* と呼ばれる屋敷が、まさにそこである。屋敷は、建築家のウィリアム・C・マーシャル(William C. Marshall)という人物によって1881年に設計・建築された。そして最初の住人がマイヤーズだったのである(夫人と共に入居)。現在はケンブリッジ大学コーパス・クリスティ・カレッジの学生寮内にあり、レセプション・ホールとして使用されている。

この調査における最も大きな成果としては、マイヤーズが、「テレパシー」という語を作成した背景を知ることができたことである。*SPR* 紀要、*SPR* 会報、その他関連記事を調査した。その語が作られるまでは、「*thought-reading*」、*thought-transference*、*ideoscopy*、*thought induction* など、様々な呼び方がされていたが、マイヤーズによって

「テレパシー」という語に集約されたのである。

まず、マイヤーズは、1882年11月、彼の師であるヘンリー・シジウィック(Henry Sidgwick, 1838-1900、哲学者、倫理学者)へ、「テレパシー」という語について創案したかどうかと聞いている(この書簡に対するシジウィックの返事は、この調査では見つけることができなかった)。その後、*SPR* 学術委員会で、この語は紹介され、同年12月にこの時のレポートが *SPR* 紀要に掲載されることで世に知られるところとなったのである。本研究調査によって、これまで曖昧だった「テレパシー」の造語プロセスの一端を明らかにすることができた。

また、マイヤーズによる最大の著作である *HP* が、当時英国でどのように取り上げられていたのかを調べるために、大英図書館において当時の新聞記事を収集した。1903年2月に発刊されたこの著作は、英国新聞紙上でも広く紹介されていたことがわかった。1903年内に限って見ても、18もの記事を見ることができた。

##### (2) 南方による、那智山における超感覚的知覚現象の背景

(東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ『エコ・フィロソフィ』第10号において発表)

まず *SPR* が発足(1882年)当時、日本において、*SPR* の活動を紹介している人物を明らかにした。それは、箕作元八(1862-1919、歴史学者)である。箕作は、1885年『東洋学芸雑誌』で、*SPR* の活動を正確に報告している。その後、箕作は、井上円了とともに「不思議研究会」という *SPR* と同じような研究会を発足させている。

一方、南方は、ロンドンにいる頃から *SPR* の存在を知っており、またマイヤーズの著作についても、日本においては極めて最初期に言及している。さらに、南方と同学年である夏目漱石(1867-1916)も『思い出す事など』(1910-1911)において、マイヤーズについて触れている。現在日本においては、ほとんど知名度のないマイヤーズおよび *SPR* であるが、南方や漱石が生きた時代(明治～昭和初期)にかけては、少なくとも知識人の内では多少の知名度はあったようである。

次に、*HP* を精読することで、南方による那智山における「体外離脱」体験(*Out-of-Body-Experiences*)が、*HP* に書かれている内容(2巻 p.322)と極めて似ていることがわかった。南方は、睡眠中、身体に「黒い紐」につながれて頭が抜け出たという経験を日記に書いている(1904年3月10日付日記)が、これは、マイヤーズが *HP* 内で示している a kind of elastic string (伸縮自在のひものようなもの)につながれて体外離脱したバートランドという人物の事例と類似している。南方は、

この頃非常に熱心に *HP* を読んでいた。しかし、南方が *HP* のこの文章を読んだ後、「体外離脱」を経験したのか、読む前に経験したのかは、今のところ不明である。那智山における「体外離脱」体験は、南方による那智隠栖期のクライマックスと言ってもよい出来事である。

南方は、現在までの研究で側頭葉てんかんを患っていたことが明らかになっている（扇谷明、「南方熊楠のてんかん：病跡学的研究」、『精神神経学雑誌』、第 108 巻第 2 号、2006 年など）。また、この側頭葉てんかんと「体外離脱」とには、密接な関係があることが近年の研究で明らかになっている（Olaf Blanke, Stéphanie Ortigue, Theodor Landis, Margitta Seeck, “Stimulating illusory own-body perceptions: The part of the brain that can induce out-of-body experiences has been located,” *Nature*, September 19, 2002 など）。

南方は、予知的感覚をしばしば経験しており、自身でそれは「前知謬 *promnesia*」と言っている。南方は、この *promnesia* という語を、*HP* で知ったと思われる。*promnesia* とは、デジャ・ビュに似た感覚であり、これは「てんかん性前兆」（単純部分発作などとも言われる）に頻繁に見られる。また、熊楠は、体外離脱、*promnesia* 以外にも「内部視覚 *entoptic*」と呼ばれる、暗闇でまぶしい「光が見える」という経験も何度か経験しているが、これも、側頭葉てんかんと関係が深いものである。

### (3) *HP* の部分的翻訳

（東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ『エコ・フィロソフィ』第 9, 10 号において一部発表）

*HP* は膨大な頁数であり、さらにマイヤーズ自身が詩人でもあるためか、独特の言い回しや難解な語句が多く、翻訳作業は難航した。しかし、そのような中でも、南方が論考及び書簡で参照した箇所については、特定し、翻訳を行い、その一部は上記誌上において、発表した。これによって、南方がどのような心霊現象に関心があったのか、その一端を知ることが可能になった。

*Promnesia* (前知謬) や *Levitation* (空中浮揚) といった専門用語を、南方は *HP* の *Glossary* (用語解説) で知ったことがわかっている。そこで、*HP* の *Glossary* の翻訳を行った。これは、今後、南方の未翻刻日記や書簡等を調査し、マイヤーズ及び *HP* に関する事柄が見つかった際、必ず役に立つと思われる。

※

本研究を通じて、マイヤーズという「忘れ去られた研究者」を、これまでの私の南方熊楠の研究の土台に据えることができた。

例えば、2015 年 4 月に刊行した拙著『南方熊楠—日本人の可能性の極限—』(中公新書) においては、4 頁に渡り、マイヤーズを紹介

し、*HP* が南方に大きな影響を与えたことを述べることができた。

また、講演会「南方熊楠—実証研究を越えて—」(早稲田大学地域文化研究所研究発表会、早稲田大学 14 号館、2015 年 9 月〔招待講師〕) 及びトークイベント「熊楠 夢について」(藤本由起夫企画展「THE BOX OF MEMORY」reading club 第一章、アートホテル *kumagusuku*、2015 年 12 月〔ゲストスピーカー〕) においても、マイヤーズ及び *HP* と南方との関係について触れることができた。

さらに、八洲学園大学公開講座『南方熊楠ことはじめ—熊楠の英文論考を読んでみよう—』では、1918 年 8 月、*Notes & Queries* に掲載された熊楠の論考“*Twins and Second Sight*”を講読した。この論考は、*HP* にみられる「テレパシー」の事例が引用されている。

以上、論文のみならず書籍、講演会などでも、マイヤーズに関する研究成果について、広く一般に向けて発信することができた。さらに 2016 年 6 月 13 日に開催される、鎌田東二氏(上智大学グリーンケア研究所特任教授)主催の、第 49 回身心変容技法研究会において「南方熊楠の心霊研究と身心変容体験—那智隠栖期を中心に—」と題して、発表を行う。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

1、唐澤太輔、「南方熊楠と「テレパシー」という言葉に関する考察」“*A Study about Kumagusu Minakata and the Word ‘Telepathy’*”、『エコ・フィロソフィ研究』、依頼論文のため査読無し、第 9 号、2015 年 3 月、pp.61-74 <http://www.toyo.ac.jp/uploaded/attachment/16222.pdf>

2、唐澤太輔、「那智山における超感覚的知覚現象—南方熊楠による記述と『ヒューマン・パーソナリティ』との比較を通じて—」“*Parapsychological Phenomena at Mt. Nachi: A Comparison of Kumagusu Minakata’s descriptions and Human Personality and Its Survival of Bodily Death*”、『エコ・フィロソフィ研究』、依頼論文のため査読無し、第 10 号、2016 年 3 月、pp.35-52 <http://www.toyo.ac.jp/uploaded/attachment/20115.pdf>

〔図書〕(計 1 件)

1、唐澤太輔、中央公論新社、『南方熊楠—日本人の可能性の極限—』、2015 年 4 月、総頁数 304

〔その他〕

1、唐澤太輔、「南方熊楠—実証研究を越えて—」、早稲田大学地域文化研究所研究発表会、

2015年9月5日、早稲田大学14号館(東京都)、招待講師

2、唐澤太輔、「熊楠 夢について」、藤本由起夫企画展「THE BOX OF MEMORY」reading club 第一章、2015年12月18日、アートホテル kumagusuku(京都府)、招待講演者

3、唐澤太輔、「南方熊楠の心霊研究と身心変容体験—那智隠栖期を中心に—」、第49回身心変容技法研究会、2016年6月13日、上智大学大阪サテライトキャンパス内グリーンフケア研究所(大阪府)、招待発表者

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

唐澤 太輔 (KARASAWA, Taisuke)  
龍谷大学・世界仏教文化研究センター・  
博士研究員  
研究者番号：90609017